

日日是好日

写真は2008年初版で、18年10月には26刷になる新潮文庫。たまたま本書の表紙に惹かれ、梅田の書店で手にした。大阪市大への地下鉄の行き帰りに、一気に読んだ。「解説」に再掲載された本書への「思い」(2006年5月21日 朝日新聞朝刊)を紹介したい。



たいせつな本 柳家小三治

森下典子著『日日是好日』

まえがきを読んだだけで、目に涙がわいてきます。

『お茶』が教えてくれた15のしあわせ」と副題にあるように、茶道についての本ですが、お茶って煙たいものだとか、突然お薄を出されたらどうしようと思う人に読んでもらいたい。なぜなら、私がそうだったから。

「日々は好日」は「日々いい日で、いい天気でありますように」というぐらいの意味かと思っていました。そしたら、「天気の日も雨の日も、すべていい日」という意味だそうです。これは大佛次郎の世界に通じる。すべての人はこの世に役目があって生まれた。不必要な人なんてない。そのデイ・バイ・デイ版というのでしょうか。

著者は、ひょんなことからお茶を始めた。ほんのちょっとしたきっかけ、というのがいい。こんなところから人生って始まるのかと。急にお茶が好きになって、のめり込むということもない。忘れない程度に時々やっていたことが、20何年たって気がつく、実は心の支えになっていたことがわかる。

人は生きてると何かそんなことがあるものです。ないと寂しい。自分の気になることやこだわることを持っているのは、こんなに素晴らしいことなのか、と感じられてうれしかった。

「余分なものを削ぎ落とし、『自分では見えない自分の成長』を実感させてくれるのが『お茶』だ」と彼女はいう。でも、そういうことを気づかせてくれたのは、実は彼女自身かもしれない。

彼女の本は、これまでも何冊か読んできました。フィレンツェの彫刻家を追った『前世への冒険』や『典奴ペルシャ湾を往く』も面白かったけれど、まさかこんな本を書く人だとは思わなかった。やっとなんか本当の自分を見つけたのかもしれない。

若いうちは、世の中で面白いと思われることを一生懸命やろうとする。でも、何か自身が伴わない。いろいろなことを知ってくると、普通に淡々と述べただけで、その向こうにさまざまなものが見えるようになる。これはそういう本です。すごい。

(平成20年9月、嘶家)

(2018年10月28日)